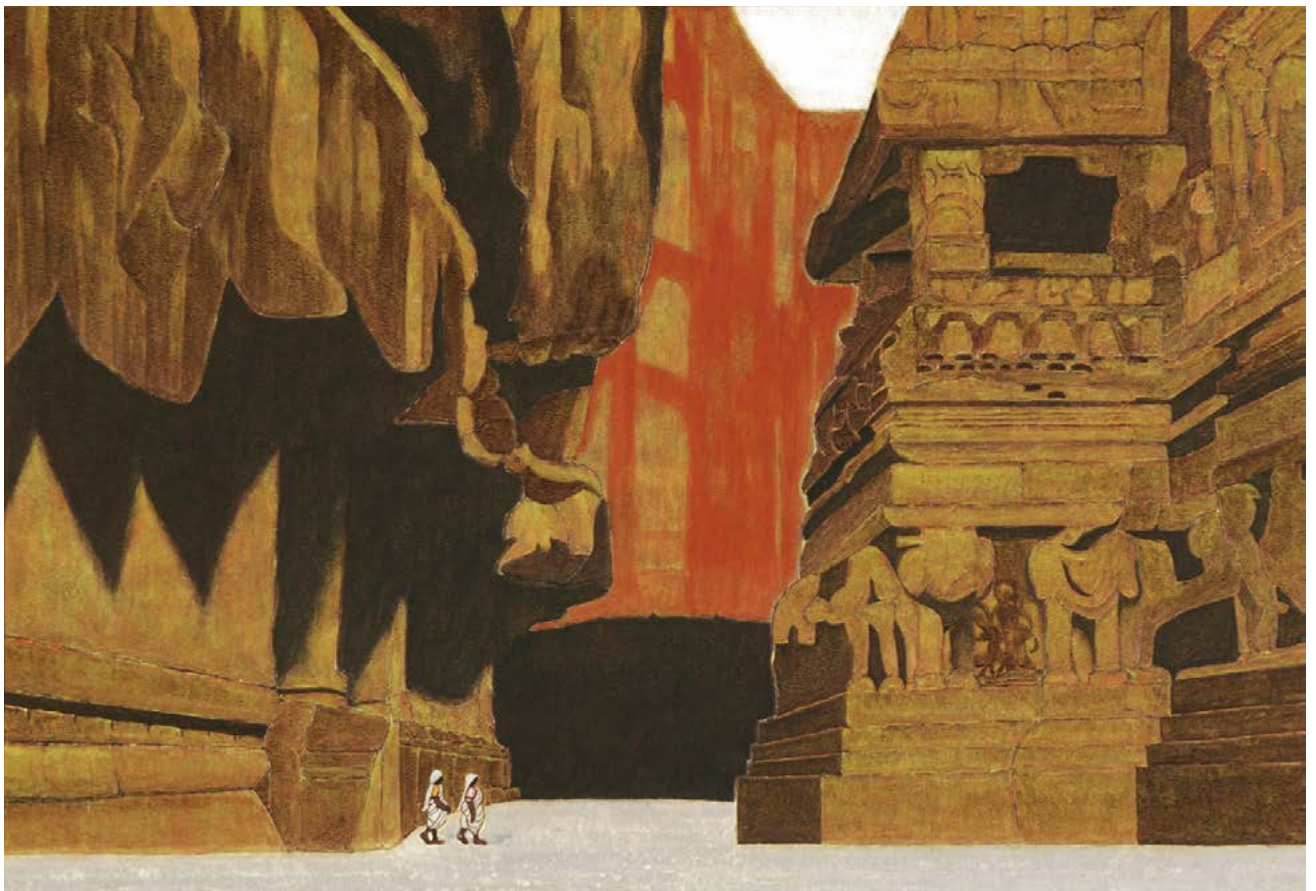


# 遊美

- 1 鈴木 京子さんの作品と  
作品についての言葉
- 2 作家探訪 森 千鶴子先生
- 3 美に遊ぶ
- 4-5 美術鑑賞旅行
- 6 心に残る私の一点  
会員のためのギャラリートーク  
あとがき



## 鈴木 京子 《エローラ (祈りへの道)》

2010年／岩絵の具・西ノ内和紙／P60号／2010年茨城県展 奨励賞受賞

出発日が近くなりJTBから「ムンバイでテロがあったので一人旅の方は鈴木さん以外全員キャンセルしたので鈴木さんも受け付けます」と。夫に相談したら、今が一番良い機会だから行きなさいと背中を押してくれました。

霧の中から朝日を浴びた光輝くタージマハルが現れました。中学生だった頃教科書で初めてタージマハルを知り、「本物が見たい」と思い続けやっと実現し、想像以上の美しさに涙が溢れました。エローラはデカン高原の岩山、岩盤を手掘りでくり抜いた

石窟寺院群です。一枚岩の仏塔やブッダの座像など圧巻でした。暗がりの中で見たアジャンタの壁画も圧倒的な存在感がありました。朽ち果てた建物の上階でイスに座り遠くを見つめる老人、水瓶を頭にのせて土漠を彷徨う女性。「泉はあるのだろうか」。朝日新聞の「インドの路上に人生のすべてを見た」と言うコラムを思い出しました。

あれから十数年が過ぎた今も鮮明に蘇ってきます。そしてますます絵を描く事が好きになりました。夫と家族に感謝です。(石岡市在住)



七宝作家  
森千鶴子先生を訪ねて

## 昇華する自然の美

幹線道路から森先生のお宅に向かう道に入ると、愛宕山、難台山、館岸山に三方を守られて田んぼが広がっていた。神社の角を曲がると、大きな木の傍らに山茶花の生け垣に囲まれたお宅がある。堅香子工房という。

### 七宝との出会い

森千鶴子先生はデザインの研究所に学ばれた後、量産の七宝製品を作る会社で原型とデザインの仕事をなさっていた。その会社の社長堀厚良氏から有線七宝の技法を教わり、作家として独立していったという経歴の持ち主だ。小さい頃から絵を描くのが好きだったという先生は、美術に関わっていきたくて思っていたが、七宝と出会って続けていけるかもしれないと感じたと話してくださった。

### 有線七宝

森先生の作品は有線七宝である。銅の素地(銅胎)にガラス質の釉薬を焼き付け下地とし、銀線を垂直に立てて輪郭線とする。表現したい色の釉薬を入れて焼くことをくり返し、表面を磨くというのが工程だ。銀線を立てる作業を見せていただいたが、厚さ0.06mm幅1.25~1.5mmの銀線を熟練の技で立てて形作っていく。細い葉もごく小さな実もここで形が決まる。繊細の極み

もりちづこ  
森千鶴子 森千鶴子

だ。さらに釉薬の色を入れて表現する過程で先生の個性が際立つ。600~800℃の電気炉に入れる回数は10回を超える。

### 植物との関わり

先生の作品に現れた花は、命がそこにあるようで、眼を奪われる。植物をみつめる作者の気持ちまで纏っているかのようだ。

横浜駅まで徒歩10分という都会に育たれた先生は、幼い頃お母様の実家である神奈川県松田町に行くことがあったくらい田舎が好きだったと振り返る。30歳になる頃、笠間市来栖に移って来られたが、その家の山茶花がどんなに美しかったかを熱く語られた。露草もお茶の白い花もすべてのものに感動できたという。この「ああ綺麗」という気持ちを有線七宝にしたいと思われた。先生の作品には、庭木や園芸植物、野の草も分け隔てなく登場する。美を抽出した植物図鑑のようだ。雑草とよばれるヨウシュヤマゴボウも先生の眼が選び取り、技を経て芸術となる。

### 堅香子工房

旧岩間町に当たる現在の場所に家を建てられて22年になる。東が開けていて三方は山。窓からの愛宕山の眺めも素晴らしく、辺りの集落はゆったりとしていて、夏には蛍が見

られる。毎日散歩していても飽きないという。「素敵ところでしよう」。私たちの眼にも桃源郷のように映った。

つる植物が好きと言い、カラスノエンドウ、ムカゴ、スイカズラ、アオツツラフジ等の名前を挙げてくださった。ここで植物の美しさを発見した喜びから数々の作品が生まれていったのだろう。写真を撮り、植物をアトリエに持ち帰ってデッサンし、図案を決めていく。そして作品によっては3ヶ月の時間をかけて生み出される。そこには先生の鋭い感性によって昇華した命が息づいている。

### インタビューを終えて

1998年には、香炉「桜」が金大中大統領夫人への来日記念品に選ばれた。1日8時間を制作に集中したこともあったという。近年心境の変化があった。今は「おだやかに」と「感謝」という言葉が胸にあると微笑まれた。



《和蘭海芋》2014年  
有線七宝合子  
径10cm高さ23cm  
第61回日本伝統工芸展入選



《枯緑文香炉》2021年/有線七宝  
径13cm高さ12cm/常陽藝文センター個展出品



《ストレリチア》2019年/有線七宝合子  
径16.5cm高さ6cm/第66回日本伝統工芸展入選



《金魚流麗》2023年/有線七宝香炉  
径13cm高さ12cm/第70回日本伝統工芸展入選



《落葉》1993年/有線七宝合子  
径15.5cm高さ9cm/第33回伝統工芸新作展入選

- 1953 横浜市生まれ
- 1979 第一回神奈川七宝展秀作賞受賞
- 1983 笠間市に居を移す
- 1993 伝統工芸新作展入選 以後12回入選
- 1993 日本伝統工芸展入選 以後8回入選
- 1997 「97国際交流美術工芸展」東京ドイツ文化会館
- 1998 有線七宝香炉「桜」が金大中大統領夫人への来日記念品となる

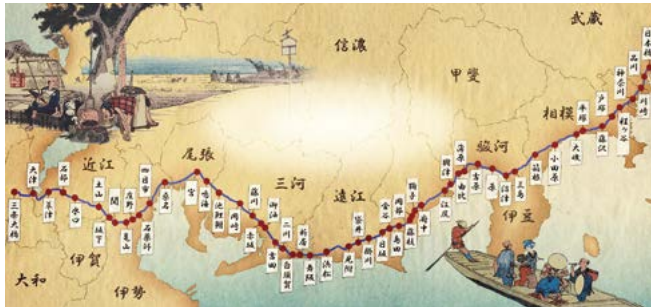
- 2007 安藤七宝店(東京銀座)にて個展
- 2008 茨城県在住「日本工芸会正会員展」
- 2009 東日本伝統工芸展入選 以後5回入選
- 2009 茨城工芸展 しもだて美術館 以後2回参加
- 2010 京成百貨店 個展 以後4回開催
- 2021 常陽藝文ギャラリー 個展
- 現在 日本工芸会正会員  
笠間市在住

- 作品常設店  
安藤七宝店(東京銀座・名古屋)  
ギャラリー空(那珂湊)





榎戸 務



東海道五十三次 浮世絵 「雲峰のマラソンの歌・日本の街道地図」より

旧東海道を歩くきっかけは2022年冬に笠間市の日動美術館で広重の東海道五十三次の展覧会を見たことだ。実際に広重が描いた宿場に行ってみようと思った。

最初は電車で最寄り駅に行き、歩いて宿場へ行ったが面白みがない。川崎宿の観光案内所の案内人は日本橋から三条大橋まで二度歩いたという。その話を聞いて私たちも旧東海道を歩くことを決めた。

2022年4月スタート。妻と二人だが妻は仕事があるので出かけるのは土日が中心。でも夏は暑くて歩けない。吉原宿までは日帰りで行ったが1日20km歩くのが限界だ。

日本橋から品川宿を過ぎると神奈川県に入る。神奈川県には9か所の宿場がある。藤沢や小田原には美味しいお店が多く何度か立ち寄りお酒で疲れを癒した。

旧東海道一の難所といわれる小田原宿から箱根宿を越えて三島宿までの箱根八里は本当にきつかった。急な石段や歩きづらい角ばった石畳がこれでもかと続いており、太もも、膝、ふくらはぎには激痛がはしり脚はガクガク。やっとの思い

で峠を越えた。箱根を越えると静岡県だ。静岡県には三島宿から白須賀宿まで22の宿場がある。静岡県は本当に茶畑が多い。天気良ければ富士山がよく見える。地域によっては昔からの家屋や常夜灯も保存されている。長く続く見事な杉並木や立派な一里塚が残されているところもある。由比宿近くの食堂で食べた桜エビのかき揚げは美味しかった。長い長い安倍川橋の手前にある有名なお店で名物安倍川餅も食べた。峠の入口に地元の方がいて、土砂崩れで通行できないと迂回路を教えてください。助かった。

愛知県には9か所の宿場がある。名古屋駅を經由して目的地に行ったので名古屋駅構内の飲食店には詳しくなった。味噌カツ、どて煮、びよりん、シャチボン、懐かしい。

三重県には7か所の宿場がある。滋賀県に抜ける鈴鹿峠は箱根に次ぐ難所だ。その日は土砂降りだったのでカッパを着て歩いた。山中に古い神社があり雨宿りしながら昼食をとった。出発しようとしたら妻の足から血が出ていて何かくっ付いてい

た。引っ張っても長く伸びてなかなか取れない。ヤマビルに噛まれた。応急処置をして出発し、やっとの思いで峠を越えコミュニティーセンターに到着した。濡れた靴下を脱ぎ休憩したのち出発したが、妻がつま先に違和感があるというので見てみると、出血しており靴の中でヒルが死んでいた。その日は終了しホテルに入って着替えたが、妻のうなじから血が流れていた。妻は何とヒルに3か所噛まれた。私は無事だった。

滋賀県には5か所の宿場がある。現在は草津宿を過ぎて石山まで歩いた。京都三条大橋までは残り約16kmだ。1日歩けば旧東海道を制覇できるが何か寂しい気持ちもあり計画が立たない。今春には行こうと思う。

先日NHKテレビのプラタモリで東海道五十七次を放送していた。大津三叉路で大阪へ向かうルートだ。東海道五十三次を達成してからの楽しみが増えた。

(桜川市在住)



何処から見ても絶景 富士市から



箱根の石畳



庄野宿



関宿



2024年11月6日～7日の2日間、参加者43名は長野市、小布施町、軽井沢町をバスで訪れました。北斎館、岩松院、水野美術館、長野県立美術館、軽井沢安東美術館及び軽井沢千住博美術館を巡る旅でした。

### 秋の美術鑑賞旅行に参加して

大竹 洋子



11月6日冷え込んだ朝、水戸を出発。色づき始めた木々を窓外に見ながら、幸運な参加者43名を乗せバスは一路日本一美術館の多い長野県へ。行き先はまず小布施町。

昼食は、信州フルーツランドで焼き焼御膳。リンゴの詰め放題にチャレンジした方も。

小布施町は、葛飾北斎が83歳から89歳の間に4回ほど訪れ、1100日ほど滞在。江戸から小布施町まで240キロ。80代の老人の足で8日間かけても訪れたかった地。それは、孫ほども年の違う理解者 高井鴻山がいたからだ。

まず、海外流出を防ぐために建てられた北斎館。企画展「北斎の植物図鑑」を見る。肉筆画を中心に展示。「北斎漫画」からたくさんの植物画が展示。デッサン力の素晴らしさがわかる。肉筆の《菊》は、明るい色や細かい筆使いにより、咲いている様々な菊が見事に描かれている。祭屋台の展示もあり、《男波》《女波》などの天井絵を間近に見ることができる。

次に、岩松院。北斎の最晩年の大作《八方睨み鳳凰図》。約1年かけて、畳21畳分12枚の檜の板に岩絵の具で描かれた。床に並べて彩絵した後、大間の天井に取り付けられた。176年経っても色あせず今も残っている。どこから見てもこちらを見据える迫力。鮮やかな色彩。圧倒される。逆に「あなたはどこを見ているの?」と問いたい。めでたい植物や隠れ



11月6日 水野美術館玄関前

富士、「心」もあると言われている。探してみても？敷地内には、福島正則の霊廟、小林一茶の蛙合戦の池などもある。

長野市若里へ移動。ホクトの創業者故水野正幸さんが集めたコレクションをもとに、2002年に開館した蔵造りの3階建て水野美術館。近代以降日本画壇を率いた、菱田春草・横山大観・鏑木清方・上村松園・高山辰雄・加山又造をはじめ、巨匠たちの日本画を、500点収蔵。「なぜ、日本画?」の問いに「日本人だから」と答えている水野さん。入り口の暖簾をくぐり「絵でよむ歌と物語の世界」を見る。古典の文学や芸能、それらに登場する動植物や景勝地を題材とした作品を展示。横山大観の《無我》。3点あるうちの1つ。幼子の表情に、何を思えばいいのか。叶うなら3点同時展示も見たいものだ。また、木曾五木を配した約700坪の見事な日本庭園があり、四季折々の表情を絵画のように楽しめる。庭石はホクト七星になっているとの事。宿泊はメトロポリタン長野。駅直結で、お土産買うのも便利。夕食はフルコース。満腹。(ひたちなか市在住)



葛飾北斎《菊図》  
1847(弘化4)年/着色・絹本双幅  
各95.5cm×31.4cm/北斎館所蔵



横山大観《無我》  
1897(明治30)年  
絹本・彩色・軸装  
102.1×55.0cm  
水野美術館蔵



葛飾北斎《八方睨み鳳凰図》(天井画)  
1848(嘉永元)年/檜板・岩絵の具・金砂子  
550×630cm/©岩松院



## 藤田嗣治さんまい

矢口 雅美



少し肌寒さを感じるなか、私にとって久々の美術館の旅になりました。

去年、笠間日動美術館「藤田嗣治展」で軽井沢安東美術館の存在を知り、是非行ってみたいと思っていたところ、今回

実現する事ができました。

館内は、アットホームな温かさを感じる藤田だけの美術館になっていました。「なぜこれほど藤田を集めたか」。始まりは“かわいい”だったと安東氏は言っています。5つの展示室は緑、黄、青、赤の空間になっている。これは安東邸を再現していて、「自宅に招かれ座り心地の良いソファでくつろぎ鑑賞する」というコンセプトだそうです。特に赤の部屋の少女と猫の“かわいい”だらけが大好きになりました。“かわいい”そんななか、最初の部屋で見た《にわとりとタマゴ》が印象的でした。藤田14歳の頃、軍医だった父から画材のためのお金を受け取り、油彩の道具一式をそろえ描き始める。その頃描かれた最初期の油彩画です。机の上にスクッと立つ黒いにわとり。胸毛の白と、赤いトサカがアクセント。絵全体がなんともかわいらしい。少年期の頃から安東氏のいうところの“かわいい”を描いているのかなと思いました。

大好きな美術館になりましたが、少し遠い。家族に頼るか、新幹線でひとりで行くか、悩みどころです。

軽井沢で行きたかった、もうひとつの千住博美術館。館内は、なだらかな斜面でワンフロアのようになっている。全体を見渡せる。鑑賞時間の配分を気にしないですみました。ガラス張りの大きな吹き抜けが



千住博 《イグアス～night fall》/2008  
©軽井沢千住博美術館 撮影：阿野太一



11月7日、バス(右)を降り、軽井沢安東美術館に入る会員

あり、アメリカハナズオウハートオブゴールドが名の通りに、ハートの葉がみごとに輝いていた。千住博といえばやはり「滝」。ドームの中にあった《イグアス》は、大きな画面に広がる見事な滝。ソファに座って見ると、そんなはずはないが、かすかなサーと水の流れる音。かすかな冷たさ。しめった空気感。心が浄化される思いでした。

今回は、特に2つの美術館鑑賞の満足感と充実感で、幸せな旅になりました。

また、思いもよらない会員様にも出会い、新しいお友達になりそうです。友の会委員、事務局の皆様、お世話になりました。ありがとうございました。

(笠間市在住)



藤田嗣治《にわとりとタマゴ》  
1901年/油彩・キャンヴァス/21.8×16.1cm  
軽井沢安東美術館蔵/  
©Fondation Foujita/ADAGP, Paris & JASPAR,  
Tokyo, 2025 E5858

# 心に残る私の一点

田中 一村 《アダンの海辺》

山田 仁子

アダンはタコノキ科の常緑樹でパイナップルに似た実を付ける。アダンとの出会いは奄美大島。乳児の頭ほどの濃いオレンジに熟した実を見た時は「何？これ！」と驚き、その存在に感動すら覚えた。その名をアダンと知り、強く心に残った。

暫くして、奄美パークの田中一村記念美術館で当時の題名《アダンの木》を初めて見た。まだ青みの強いアダンが描かれていて、もう少し赤みが欲しいと初感想を持った記憶がある。鹿児島在住中に2回、一村の《アダンの木》の前に立った。その間、いくつかの島を訪れアダンの群落を見つけて小躍りした。赤オレンジに熟した実はとても美しい。

2006年、鹿児島で先行上映された映画「アダン」を観た。鹿児島出身の俳優榎木孝明が一村の凄まじい生き様を熱演した。内容のトラブルでお蔵入りになったことが残念。

千葉市美術館での一村展で改題された《アダンの海辺》をじっくり鑑賞した。青みの残る未熟の実のよさがわかったような気がした。その色合いは絵の中で確かに吻合し、溶け込んでいる。

昨秋、東京都美術館の一村展で《アダンの海辺》を久しぶりにしみじみと見入った。アダンに視線を向けがちだが、一村は「この絵の主要目的は乱立する夕雲と海浜の白黒の砂礫である」と述べている。それらを合わせ見ると、中央に描かれた色づき始めたアダンの実が絵全体の静寂を集めているかのようで、何と魅惑的なことか！（日立市在住）



田中一村《アダンの海辺》  
1969／絹本着色・額装  
156.0×76.0mm／個人蔵  
©2025 Hiroshi Niiyama

## 会員のためのギャラリートーク

2024年12月10日

### 没後100年 中村彝展 アトリエから世界へ

(2024年11月10日～2025年1月13日)

灰原 啓子

吉田衣里首席学芸員は、冒頭に「最近の子育て世代が中村彝<sup>つね</sup>という名前を読めないことがショックでした」とおっしゃった。郷土の生んだ偉大な画家であるにも関わらず知名度が下がっているようであると。そこで今回は子供向けの漫画のチラシも作り宣伝に努めたそうである。ギャラリートークでは、中村彝の制作の背景についての話がたっぷり聞けた。「こう推測するにはこのような裏付けがある」という資料の解き明かしが大変興味深いものだった。質問も随時できて、ギャラリートークの面白さがあった。私が最も興味をひかれた話は、その時代の美術書のことである。印刷技術が乏しいなか、海外の美術書は白黒の印刷で出回っていたそうである。中村彝はそれらを翻訳し、技法を観察し、手垢で汚れるほど必死に研究した。戦後、海外作品の収集が始まり、日本にルノワールが来た。初めて見た実物の絵は、中村彝の画風を一変させた。その時、感激のあまりに描いた絵がある。《幼児》である。今回はルノワールと並べて展示されている。中村彝の感激と興奮を伝えたいという吉田首席学芸員の熱意の表れの展示である。そう聞くと展示の意図の深さというものにも着目出来て、さらに鑑賞の面白さを感じた。世界の絵画を必死に研究していた中村彝とそれを支えてくれていた人々との絆の解説もとてもわかりやすく良かった。（水戸市在住）



2024年12月10日《中村彝展》ギャラリートーク  
参加会員（前中央 講師の吉田衣里首席学芸員）

## あとがき

- やっとなんて、と言おうか、ようやく、と言えるのか、コロナの呪縛から解放され、4年ぶりにトルコへの海外美術鑑賞旅行も敢行できた。しかし、平穏に思われた彼の地も、周辺ではさらにきな臭い情勢となってきた。日本においても年末年始は複数の流行病が横行した。油断ならない。
- 年をまたいで「没後100年中村彝展」が開催された。中村彝が日本の洋画黎明期において、まさに命懸けで追求していた芸術を講演会やギャラリートークでより一層知る事ができた。静かに美術鑑賞をできる事がいかに幸せな事であるのかを改めて思う。
- 下記の方々から、本号で使用した作品の著作権使用許可、掲載許可及び

- 画像データの貸与をいただきました。厚くお礼申し上げます。
- ・表紙画像データを茨城県美術展覧会の天羽かおる氏から有償貸与
- ・3頁《東海道五十三次》データ使用を森塚良郎氏から無償許可
- ・4頁の《菊図》画像データを、北斎館中山幸洋氏から無償貸与
- ・同頁の《八方睨み鳳凰図》画像データを、岩松院 渡辺みよえ氏から有償貸与
- ・同頁の《無我》画像データを、水野美術館 桐渕彩良氏から無償貸与
- ・5頁の《にわとりとタマゴ》の著作権使用を日本著作権協会の吉澤昭博氏から有償許諾。また、画像データを、軽井沢安東美術館 主任学芸員 樽沼範子氏から有償貸与
- ・同頁の《イグアス》画像データを、

- 軽井沢千住博美術館 服部麻里氏から無償貸与
- ・6頁の《アダンの海辺》の著作権使用及び画像掲載許可を新山 宏氏及びNHK出版 磯貝哲也氏から無償で、また、画像データを、千葉市美術館 田部井栞里氏から有償で貸与

茨城県近代美術館 友の会会報

## 游美 No.108

発行 2025(令和7)年3月  
編集・発行 茨城県近代美術館友の会  
〒310-0851  
水戸市千波町東久保 666-1  
TEL.029-243-5111  
E-mail : f.momaibk@gmail.com  
HP : https://fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷